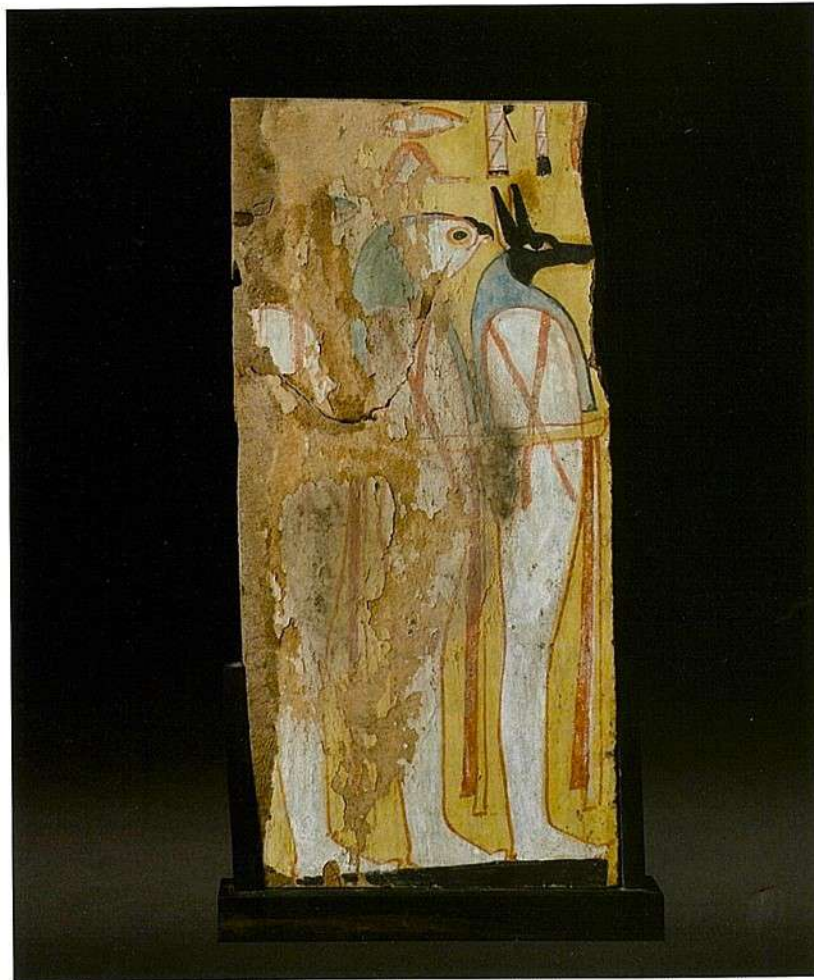


NARIWA MUSEUM

# 高梁市成羽美術館 だより

NO.39 ◆ 2023.3

編集・発行：高梁市成羽美術館  
〒716-0111 岡山県高梁市成羽町下原1068-3  
TEL 0866-42-4455 FAX 0866-42-4451  
<https://nariwa-museum.or.jp/>



## 人形棺断片

木 第3中間期(第21王朝) 縦48cm

「ドゥアト(地下の冥界)の領主」とされる60神のうちの3小神が見てとれる。  
鳥獣類の頭を持ち、白い屍衣を纏ったミイラ姿の神である。

生誕140年記念

## 芸術家 児島虎次郎の古代エジプト蒐集記

2022年4月9日〔土〕～6月26日〔日〕



展覧会ポスター

## 第1章

## 虎次郎、古代エジプトに心うばわれる

最初の章では、①まじめで好奇心旺盛という虎次郎の性格がコレクションの土台となったことへの理解、②虎次郎の古代エジプトに対する強い畏敬の念への理解を目標としました。

癖の強い筆致で几帳面に書かれた日記、エジプトで学んだことをしたためたノート、現地で描かれたスケッチの数々が、虎次郎の人物像や収集の経緯を理解する手がかりとなりました。さらに、帰国後制作された作品、特に古代エジプトをオマージュしてデザインされた来客用住宅「無為堂」を

## 第2章

## 虎次郎が魅せられた古代エジプトアート

復元した一角は、来館者に虎次郎の計り知れないエジプトへの思いを伝えることができました。

本章は、虎次郎自身がアーティストであったことから、古代エジプトアートとそれを製作する多彩なアーティスト（職人）に焦点を当て、当時の職人たちの高度な技術と、使われた材料を詳しく紹介しました。虎次郎が感動したであろう部分を自分なりに発見・共感していただけたと思います。

## 新しい試みにチャレンジ

本展は、親子でも楽しめる「親しみやすさ」とエジプトに興味のある方でも楽しめる「学術的奥深さ」を両立させる試みでもありました。

## ①大学生とコラボした展示空間づくり

虎次郎をキャラ化して案内役とし、さらに古代エジプトのシンボルをグラフィックや空間デザインに活かしました。デザイナーは、岡山県立大学の4年生（当時）太田菜々実さん。ポスターや解説パネルだけでなく、入口ゲート、階段などにもおしゃやれで魅力あるデザインが施され、来館者のわくわく感創出に重要な役割を果たしました。

## ②当館オリジナル情報を提示

資料にかかれた絵やヒエログリフの意味、造形の意味など、当館の資料がもつオリジナル情報をできるだけ多く提示し、情報に厚みを持たせました。



当館では児島虎次郎の生誕140年を記念し、彼が収集した約200点にもおよぶ古代エジプトコレクションとエジプトに関わる作品・資料を学術的に見直し、その成果を展示及び図録（後述）として公開しました。

奇しくも2022年は、ヒエログリフ解読200年、ツタンカーメン王墓発見100年、そして虎次郎が初めてエジプトの地に降り立ってからちょうど100年という、トリプル記念年。そんな年にこのエジプト展を開催できたことは素晴らしい巡り合わせでした。

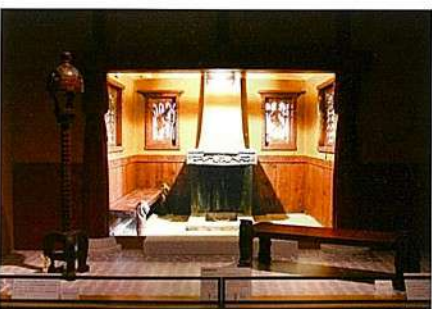
本展は、第1章としてまずは虎次郎自身のエジプトにまつわる資料、作品を展示し、彼の古代エジプトへの思いに共感していただいた上で、第2章としてコレクションを見学していただく構成としました。



会場風景



虎次郎を魅了した古代エジプトアートの数々



「無為堂」暖炉室の復元展示



虎次郎と一緒にコレクションを見学に！



田澤恵子博士による記念講演会  
「古代エジプト文化と  
虎次郎コレクションの意義」



エジプト初上陸100年記念イベント  
神様のお面を被ってご来館のお客様



新図録『児島虎次郎 古代エジプト蒐集録』  
1,650円(税込)  
ミュージアムショップにて販売中  
当館HPより通信販売も承ります

### ③ イベントで多様な観客を

児島塊太郎理事長と古代オリエント博物館の田澤恵子博士の講演会のほか、ワークショップ、ギャラリートークを週末ごとに開催。さらに虎次郎のエジプト初上陸100年記念日の6月12日には特別イベントを催しました。当館HPからダウンロードした神様のお面を被れば入館料が無料になり、三宅製菓さんの「どらやき虎次郎」を先着100名さまにプレゼント。当日はスタッフも神様お面を被り、館内にたくさんエジプト神が出没する楽しいイベントとなりました。

### ④ 虎次郎人形が案内するクイズラリー

虎次郎キャラの認定シールがもらえるクイズラリーを開催。ワークシートを頼りに館内を巡ると、虎次郎キャラの人形(前出の太田さん作)がクイズの場所を教えてくれます。事前に用意した500部のシートが足らなくなるほど多くの方にご参加いただきました。



### ⑤ ガイドパンフレットを配布

子どもが見るだけでも楽しめるパンフレットを製作、高梁市内の全小中学校に配布しました。

### 新しい図録の発行

展示の公開に合わせて図録も一新しました。「児島虎次郎 古代エジプト蒐集録」と題した図録は、調査で新しく発見されたことが掲載され、かなり学術的な趣の仕上がりとなりました。

期間中約5,000人にご来館いただき、ターゲットに設定していた若い世代の方々も多く訪れてくださいました。アンケートでは、約7割の方から「とても良い」との評価を得、みなさんに少しでも虎次郎の思いを伝えることができた実感しました。

最後に、コレクションの学術検証にご協力いただいた古代オリエント博物館の田澤恵子博士、貴重な資料を借用させていただいた個人並びに関係機関各位に厚くお礼申し上げます。

## 児島虎次郎を偲ぶ 絵画コンクール

2023年1月12日(木)～2月12日(日)

令和4年度は、市内小中学校19校から1,149点の応募がありました。今年度も故郷の風景、学校行事、ペットなど様々なテーマで描かれた個性豊かな作品が集まりました。審査を経て各学年で最も優れた作品である「児島賞」、次点にあたる「渡辺賞」などの受賞作品を含む186点を多目的展示室にて展示しました。1月26日(木)に表彰式を開催し、受賞者には高梁市教育委員会小田幸伸教育長より賞状と記念品が贈られました。また、今年度は絵画修復家の大原秀之氏が各作品の講評を行い、受賞者は熱心に耳を傾けていました。

児島賞、渡辺賞受賞者は次の通りです。(敬称略)

### 児島賞

- 高橋杏奈(成羽小1年)
- 樋口弥里(川面小2年)
- 太田啓心(高梁小3年)
- 松本優愛(落合小4年)
- 大内文瑠(川上小5年)
- 藤本鈴楽(川上小6年)
- 藤井優衣(成羽中1年)
- 森下真弥(高梁北中2年)
- 平松倅好(川上中3年)

### 渡辺賞

- 柏寄あんじゅ(成羽小1年)
- 渡邊日和(川上小2年)
- 田上姫羽(落合小3年)
- 大西紗楽(松原小4年)
- 銘形晴(成羽小5年)
- 木口詠太(成羽小6年)
- 廣金福美(成羽中1年)
- 坂田莉愛(成羽中2年)
- 庄沙夜子(成羽中3年)



高梁北中学校2年  
森下真弥さんの作品  
《祖父のピオネ農園》



1月26日(木) 表彰式

# 「念ずれば花ひらく」詩人坂村真民の世界

2022年7月9日〔土〕～9月4日〔日〕



展覧会ポスター

時代の真民と生徒との心の交流を表した手紙や、真民の家族や尊敬する師との関係など、写真と作品を交えて真民の生きた足跡をたどりました。今ではなかなか見られないような先生と生徒との親密で温かい心の交流の跡をみると、真民が如何に苦勞しながらも真剣に生き、生徒と真摯に向き合ったかを感じます。

祈りの詩人として多くの人から愛された坂村真民の世界展は、新型コロナウイルスによる延期の末、令和4年の夏に開催されました。展覧会は、四国砥部町にある坂村真民記念館の全面的な協力を得て開かれました。開会式では館長ご夫妻（奥さまは真民先生の三女）の出席をいただき、式典終了後には西澤館長によるギャラリートークを行いました。坂村真民の人となりや生活、詩の生まれた背景などを詳しく解説していただきました。

「念ずれば花ひらく」の言葉で多くの人に親しまれた坂村真民の詩を、さらに一人でも多くの方に知って頂こうと企画し、美術館2階展示場の3つの部屋で展示しました。

第1室では、高校の国語教師だった

第2室では、真民詩に若くして魅了され、修行時代にもその詩から大きな励ましを得たと言われる、鎌倉円覚寺管長横田南嶺師による真民詩の墨蹟がまとめて展示されました。円覚寺の師の自坊黄梅院の掲示板には、月替わりで真民詩が書かれています。南嶺管長の墨蹟には、明るく清らかな気が満ちて、真民詩と共に味わい深いものでした。

第3室では、真民の代表的な詩墨作品が壁面を飾り、ケース内には色紙、短冊をはじめ思索ノートや万年筆、いつも身につけていた数珠や眼鏡など身の回りの品々を展示しました。最晩年（90歳代）の大きな詩墨作品からは、真民の精神の清らかさと力強さと共に、まさに年を重ねて円熟した人柄の素晴らしさを感じられて



会場風景



西澤孝一館長によるギャラリートーク



横田南嶺管長による記念講演会

観るものを魅了します。期間中何人の方が、これらの作品の前でじっと動かず真民の詩を噛みしめていたものでした。

会期中の7月17日（日）には、横田南嶺管長による記念講演会が隣接のたいこまるプラザ「伊藤記念ホール」で開催されました。管長自らお作りいただいた真民詩の掲載されたレジュメを皆さんにお配りして、90分の熱演をいただきました。講演は「念ずれば花ひらく世界」の演題で、坂村真民の生涯をたどりながらその時々生まれた詩を一つひとつ紹介し、真民の仏教徒としての生き方と、そこから生まれた詩の意味を丁寧に解説してくださいました。なかでも、真民が毎日未明混沌の午前0時に起きて詩作に励み、夜明けとともに

朝日の光を吸うという習慣が、岡山黒住教の教えからお話しされて、真民の学びの広さを知ることができました。講演会には県外からも遠路沢山の方がお越しになり、南嶺管長のお話熱心に耳を傾けておられ、「貴重な時間を過ごさせていただきました」と感謝の言葉をいただきました。また8月7日（日）には、レクチャールームで西澤館長から「坂村真民の生き方とそこから生まれた詩について」という演題で講演をいただき、親族でない知り得ない貴重な内容のお話に参加者一同感激をして聴き入りました。

コロナ禍の中ではありましたが、熱心な来館者に支えられて最終的に3,000人がご覧になりました。

館長 澤原一志

## PINK革命 WAKU WAKU 安食潤展

2022年7月9日[土]ー9月4日[日]

安食潤氏は鳥根県在住の陶芸家です。2003年から熊谷陶料社長の古老熊谷忠雄氏(岐阜県)に師事し、翌年、出雲に帰郷。その後は父安食ひろ氏の許で修業を積みまます。2013年に第6回現代茶陶展にて塩釉茶碗が入選、2014年には第31回田部美術館大賞「茶の湯の造形展」にて塩釉茶碗が奨励賞を受賞。国内を中心に精力的な活動を続けている、お人柄を彷彿とさせる優しい気なのにどっしりとした作陶をする作家です。



会場風景

今回、作品が展示された場所「静水の庭」前ロビーは吹き抜けで、天井まで続く無機質なコンクリート壁や巨大な窓ガラスが、全体を覆いつくしています。幾何学的でクールな雰囲気が出ると、異空間へ来てしまったかのような感覚になる、当館の空間の中でも特に静謐な印象が強い場所です。展示作業がはじまり、まず運びこまれたのは巨大な黒い炭の塊。そこへ、安食氏の今回のコンセプトであるピンク色の作品群が、次々と設置されていきました。

正直、当初展示計画を聞いた時点で、炭とピンク色のみの作品がどのようにつまみませんでした。そんな懸念はすぐに払拭され、それらは自然の中に芽生える野花のように馴染み、空間を彩り、明るくしていきました。真黒い炭はさらにその印象を強め、ロビーはまるで初夏のような爽やかさが香っていくかのようにでした。

会期中、この空間に入った来館者からは、いつもの成羽美術館の印象が一変していたからか「わあ」と、嬉しそうな声が多く発せられていました。ちょうどよく「静水の庭」の睡蓮も見頃を迎えていて、静かだった星に生命が誕生したような、賑やかで楽しげなワクワクとした雰囲気が空間内に溢れました。まさに、「PINK革命」!

## 岡山県立大学デザイン学部 ミュージアムグッズ共同開発 「NARIWAFLORA プロジェクト」

もはや定番企画となった岡山県立大学とのミュージアムグッズ共同開発は、今年で9回目となりました。テーマは「成羽の植物・貝化石と当時森に棲んでいた生き物」。テキスタイル分野・セラミック分野計11名の学生が取り組み、Tシャツ、絵葉書のほか、今までになかった掛け時計や風鈴といった作品も登場しました。



化石をテーマにするとき、学生にとって全くなじみのない、古代の動物や植物を扱うのはとても難しいと感じます。デザイン化するにあたってどんなによく



化石を観察していただいても、初めは科学的に正しく「形」を拾えていない図案が多くなってしまからです。しかし、学芸員がその点を指摘していくに従い、ミュージアムグッズとしてふさわしい、学術的な確かさとユニークなデザイン性が融合した素晴らしい作品へと変わっていきます。県大生のセンスの高さと若い柔軟な力に、頭の固い担当者は毎回脱帽させられます。そして、その過程が毎年楽しみで仕方ありません。

若い方々が「仕事」という形で地域の美術館に関わっていたことは非常に重要で、美術館の存在意義もぐっと高まります。来年度も同じく「化石」をテーマにする予定です。マンネリ化などどこ吹く風の、このプロジェクト。来年は10周年です!どうぞお楽しみに!



風鈴を1点1点丁寧に窯づめ中



シルクスクリーンで手ぬぐいを製作中



完成したグッズの一部

# 流麻二果 その光に色を見る

## Spectrum of Vivid Moments

2022年9月17日[土]—12月18日[日]

「成羽美術館の光に色を見る」

流麻二果

私は自然光のもとで描き、だからこそ見えてくる生きた色を見つげようとしている。今回の展覧会では、展示室の窓のスクリーンを開けさせてもらった。

九月の朝、鮮烈に清々しい光が差していた。良い睡眠を得て、気持ちよく迎えた朝のような生命感が満ちた会期の始まりだった。午後、傾き始めた陽の暖かさに包まれて、微睡と同調するかのように作品が目優しく入ってきた。

展覧会が終わろうとしている十二月、太陽はぐっと傾き、より深い光の筋を展示室の奥にまで届かせていた。冬になって初めて光を浴びた色が恥ずかしそうに、誇らしげに輝いていた。

会期末の閉館時間にはとうとう太陽が沈み外に闇が訪れた。山の深さに月の輝きや生活光の混じった複雑な濃い色だ。私がいつも描く、様々な色を何層にも重ねた事で生まれる深い青が、窓の外に現れた。私が光を見つめて描き重ねる多層な色が現実と重なった。

いつもスクリーンで閉じている窓が開いたことで、成羽美術館という建築が息をしているように感じた三ヶ月だった。建築を生きた物のように感じたのは初めてで、展覧会自体が生きていたように思う。この息吹を再現させて下さった方々、そして会場で味わって下さった方々に感謝申し上げます。



流麻二果氏は「色彩」を扱うアーティストです。手がける範囲は平面絵画だけでなく、建築空間なども含まれ、国内外で活動の場を広げています。

本展では流氏の新作絵画約30点を展示。なかでも、今注目されている「女性作家の色の跡」と題する絵画シリーズは、成羽での個展開催を機に、作品調査から開始し、制作に取り組みされました。同シリーズは、かつて時代に翻弄され、現代においては忘れ去られていた女性作家の作品をモチーフにした絵画制作の試みです。倉敷市立美術館、高松市美術館からモチーフとなった作品を拝借し、流氏の作品と並べて展示。ジェンダーの問題が取り沙汰される昨今、「女性」を取り巻く価値観の変容をも内包した流氏の作品は、多くの鑑賞者に共感や感動を与えていました。また、今回モチーフとなった作品そのものにおいても、力強く生きたであろう女性たちの命の光が、煌めきを帯びて現代に蘇ったように、強い光―色彩―を放っていました。

流氏の希望により、展示室にある窓のスクリーンを全て開け、あえて自然光を取り入れた展示空間となりました。自然の光は作品の微細な色彩表現も映し出し、鮮やかで奥行きのある作品はより一層引き立ち、観る人々を魅了しました。

本展覧会にご協力を賜りました関係者各位に、この場をお借りして心より御礼申し上げます。

# 野田正明 50年の軌跡

— ニューヨークから世界へ —

2022年9月17日〔土〕—12月18日〔日〕

「移り変わるアートシーンと、

四季の成羽美術館」

野田正明

9月台風間近の開催時、真夏の深緑、秋の紅葉、終幕直前の冬の雪景色と四季に彩られた、「進化と改革」。ロビーの、黒御影石「クロノス」。鑄造ステンレス「先見」「漸進」は、移動する影のストライプの中で絶妙の対比を放っていて、訪れた人々を魅了し、屋外での和太鼓、ヴィオラの演奏会もあり、5度も来たりピーターにも領けます。

公共モニュメントは郷里福山14カ所を含め、広島、松江、大阪、京都、東京、ギリシャ、ニューヨーク、中国、モンゴルに恒久設置と共に、アートによる文化交流を同時に行いながら現在に至っています。

アートの激戦区ニューヨークでの45年間は、ベトナム戦争後の犯罪都市として名を馳せた時代から、アート・バブル、湾岸戦争、9・11テロなどに揺さぶられながら、ミニマル、コンセプトチャール、ネオ・イクスプレシヨニズム、グラフィティ、ネオ・ポップ、ネオ・コンセプチャリズムを経て、多極化の時代に入ってきました。

時代の変転や、交友から多くの刺激と示唆を受けてきましたが、時代の流れに沿うのではなく、自身と向き合い、自己確立を全うすることを目指しながら、アーティストとして生き、次世代へと繋がっていくことができたかと考えています。



2



3

野田正明氏は、1949年広島県福山市に生まれ、1977年以降ニューヨークを拠点としながら世界各地で個展を開催、また各国主要都市にモニュメントを設置するなど国際的に活躍しています。本展では、版画とドローイング、彫刻作品で会場を構成し、大阪芸術大学在学中から現在にいたるまで、50年にわたる創作の軌跡をたどりました。

野田氏は絵画や版画といった平面を扱う作家として出発しましたが、30代からは彫刻にも取り組み、鏡面仕上げのステンレス彫刻は今では代名詞とも言えるでしょう。ジャンルの垣根を越えて多彩な作品を手掛ける野田氏は、「アートとは」との問いかけに「時とともに成熟してゆくもの」、そして「コミュニケーション」であると答えられました。一般に、作品の完成が一つの終着点と思われませんが、この発言からは常に未来へと志向する芸術観がうかがえます。それと同時に、作品を基点とした人々との出会いと対話こそが、野田氏の作家としての歩みを導いてきたものであったこともまた感じさせます。まるでエネルギーが満ち溢れるかのように2次元から3次元へと展開された作品の勢いそのままに、この度の展覧会での様々な競合を契機として、この先も新たな次元へと活動を繰り広げていかれることでしょう。

会期中には、近隣の小中学校において野田氏による絵画制作の出前授業を実施しました。野田氏との出会いによって時かれた種が、時を経て未来に芽吹くことを楽しみにしたいと思います。

# 安藤忠雄 文化講演会 「生き残りをかけて」

2022年11月3日「木・祝」



講演会の様子

美術館サポート組織「成羽美術館の環境を守る会」の皆さんや、毎朝掃除に精を出しているスタッフの努力の賜物だと有難い思いでした。

館内2階では、展覧会を開催中の流麻二果さんと挨拶され、作品をご覧になりました。1階ではオリエント室の児島虎次郎蒐集のエジプトコレクションの数々、そして野田正明さんの彫刻と版画をご覧になり光溢れた美術館の空間に目を細められていました。

午後、講演前のサイン会では、既に長蛇の列のお客様一人ひとりのお名前をサインされ、皆さん感激の面持ちでした。サイン会は講演終了後も行われて、この講演会のために特別に描かれた成羽美術館のスケッチ等が貼られた本をお買い求めいただきました。この本の収益はご夫妻がウクライナに寄付をされるということでした。

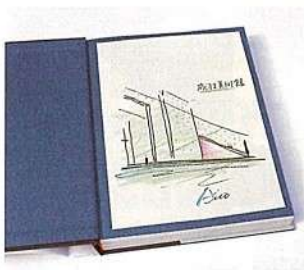
「生き残りをかけて」と題した講演は、安藤さんのユーモア溢れた語り口の中に、実に味わい深く示唆に富んだ内容で、笑いと共に時代を真剣に案ずる安藤さんの言葉に聴衆の皆さんも引き込まれた様子で、あっという間の1時間少々でした。講演後の質疑応答では、熱心なファンの方々から、抱えている悩みや

生き方の迷いに関する質問があり、それに丁寧に答えられる安藤さんの温かい心を感じました。講演では、特にこれからの時代を生きる若者や子供たちに、我々がどのように対するべきか、また今を生きる若者たちへ向けて「生きる力」について、安藤さんが自ら歩んでこられた人生を振り返りながら切々とお話しくださいました。若者には何よりも「好奇心」「自らのビジョン、目標」が大切であること、そして生きる根性、「諦めない気持ち」を幾度も強調されました。次代を担う若い人々に対する安藤さんの温かな激励の心が伝わって来るようでした。

講演が終わり、若い方々からは「元気をもらった」「頑張る」と力強い言葉をお聞きしました。美術館でも秋の展覧会の会期中に、大きなイベントの華を添えていただいたような気持ちで感謝と感激の一日でした。

今後もスタッフ一同力を合わせ、より素晴らしい美術館を目指して頑張りたいと思います。

館長 澤原一志



『安藤忠雄の建築5』  
スケッチ画付き  
5,390円(税込)  
ミュージアムショップ  
にて販売中  
当館HPより通信販売も  
承ります

## 新築開館30周年に

### 向けた取り組み

#### 改修工事編

2024年に現在の高梁市成羽美術館は開館30周年を迎えます。記念の年を控え、この数年は大規模な設備改修を行い、約30年間走り続けてきた身体を労わるように着々とメンテナンスを進めています。

まず、2017～2021年度にかけて空調設備を更新しました。2020年度には美術館の外の看板を新調。2021年度にはLEDスポットライトを導入し、作品をより良く鑑賞していただけるようになりました。来館された方は展示空間の印象が変わったように感じたのではないのでしょうか。その他にも、老朽化している箇所の修繕を随時実施しています。

今年度以降はエレベーターや照明設備、火災感知設備の更新などの工事を計画し、さらに安心、安全に美術館で過ごしていただけるようになる予定です。

設備面でも万全を期して新築開館30周年を迎える準備をしています。皆さんもぜひ2024年の成羽美術館30周年を一緒にお祝いしましょう!!